

# 滞英 2 年の 生活を顧みて

## — 5 —

### 英国の古さと新しさ

実は 私はこの連続記事のうちの〔3〕(大学 No. 80 1961-4)で 英国での日常生活の折にふれて 見たり・聞いたり・感じたりしたことを書くつもりで 書き出したのであるが いつの間にか筆がすべて大学のことや研究生活の方に話が進んでしまい それが〔3〕・〔4〕と続いてしまったのである〔3〕のはじめの方と後半とがうまくつながっておらず 大変ちぐはぐのものとなってしまって申しわけないが これは過ぎたこととして かんべんして頂き〔3〕の前半の続きとして この文章を書くことにしたい

日本という国は 古さと新しさ 東洋と西洋とが無統一に混在している国だということをよく言われる これとは対称的に 英国は古いものを大変に尊ぶ国がらであるということもまたよく言われていることである しかし 私が2年間にうけた印象では 英国もまた古いものと新しいものが混在した国だと言うことができる

英国人が古いものを大変大切にするということが 日常生活のすみずみにまでみとめることができる。よたよたの20年も30年もたった古いオースチンやヴォクスールなどの車が今もってたくさんまちの中を走っている風景は 英国ならではみられない風景であろう。

アメリカでも フランス・ドイツあるいは日本でもタクシーは割合に新しいスタイルの車を使っている。ところが 英国では タクシーといえば全国一様にピシヤツと形がきまっている。それも流線形以前の黒ぬり箱型の自動車である。それが1960年に作られたピカピカの新車ですら このスタイルなのである。おまけに折りたたみ込み式の補助椅子までついているのであるから まさに 昭和初頭のスタイルといっても過言ではあるまい。タクシーの運転手に言わせれば このスタイルがタクシーには一番良いのであり あつかいやすいので 何も流行に従って スタイルを変える必要はないだろうというわけである。はじめて乗ったとき 小学生のころに乗ったタクシーをふと思い出し 微笑の湧いてくるのを禁じ得なかったものである。もっともこの微笑も 料金支払の際にあつかましくも請求されるチップ

に出会ってとたんに消えてしまったが…… 悪い運転手に出会わし チップを忘れてたりしようものなら 悪口雑言をふりかけられるのを覚悟しなければなるまい。

古さを尊ぶ風習は 英国人の家庭に入ればますますはっきりする。どこの家にも 大変古めかしいテーブルや食器戸棚などがだいたいそうに使われている。家庭の主婦のだいたい仕事の一つに これらの家具類をみがき立てる仕事がある。一週一回 日をきめて一生懸命ふいたり ワックスを塗ったり みがきあげたりして喜んでいるのである。不幸にも英国には ウルシはないし 日本ほど進歩したニスがないので ちょっとしたはずみに 熱いやかんを机の上に置いたりすると 白いあとながついてしまう。従って 食事の際も木製の皿敷を使って みがきあげた食卓を保護しようと懸命である。

有名なハリスツイードのスポーツジャケットは 英国人の物を大切にする風習によくマッチした いかにも英国的な洋服だといえよう。事実これほど上下を問わず 広く愛用されている服地はない。あの厚ぼったい 毛むくじらの洋服は 普段着として使っても20年から30年も 永持ちするといわれている。それほど永持ちする服地なのに 多くの英国人はその上さらに 袖口とかひじのところに皮当てをしているのである。まったくご念のいった徹底さであると感心させられる。その上 おじさんが着ていたものどか おやじが着ていたものどかというハリスツイードの上着を 得々として着ている人にときたま出会わずのであるから こうなるともうわれわれは完全にお手あげである。

鉱物学会での講演者の話し 始めの文句や Geologists Association 100年祭における 会長夫妻が参会者を接見する仕方などが 大時代的で昔ながらの習慣を墨守していることは前にも書いた。こうした古い習慣の墨守は 至るところにみられ college の生活でも常に会わす。

たとえば 学生が組織している演劇部が学内公演をするときには ちゃんと印刷された招待状が配られ その隅のところに はっきりと formal dress (礼装)と書き込んである。つまり 参観に行く人は男ならディナージャケットを 女ならイブニングドレスを着て行かなければならないわけである。それが学校の講堂あたりで公演する うまくもない学生の劇を参観するために 日本でいえばモーニングないしは紋付羽織に訪問着か振

袖姿といった服装をしてゆかねばならないと言うのであるから まったく恐れ入ってしまう。

エンビ服姿のイートンボーイについては たいていの方達がすでにお聞きおよびのことと思う。10才前後のかわいい少年達がエンビ服姿でイートンの町を歩いている姿は外来者には かわいらしくも見えるし アナクロニズムの象徴とも受けとれる。イートンカレッジはもともと貴族の子弟の教育のために作られたもので 日本でいえば学習院あたりに相当するのであろうか。

昔のお城があり 今でも週末には女王様がくるウィンザーの町のテムズ河をへだてた町つづきにイートンの町がある。町自身が大変古めかしい屋並びの続きである上に イートンカレッジの校舎がまた一段と輪をかけた古めかしさを持っている。

教室などをのぞいてみると 薄暗い部屋の中に いかにも古めかしい木製の椅子と机が並んでおり 机も傷や彫り込まれた名前で一杯になっている。廊下の壁・柱・とびらにも一面に年代と名前が彫り込まれており しかもその多くが 祖父・父・子・孫とか兄弟とか一まとめに彫ってある。1710年 O. S. Heavens, 1753年 H. H. Heavens, 1801年……といった調子である。

建物も 環境もすべて古さがしみ込み 伝統が生きている こうしたところで 創立以来のエンビ服の制服を着 昔ながらの特権階級的教育を行なっているのである。イートンカレッジは日本でいえば中学校と高等学校を一続きにしたようなもので ここを卒業するとオックスフォードやケンブリッジの大学に行く。この人たちの将来は政治家とか会社のマネージメントとか 英国の指導的階層になるようにきめられているのである。

こうした いわば封建的な制度がいまだに生きており そうした教育を受けさせるために親は一年に 100万円を越える学費を支出しているのである。

イートンカレッジの場合でも オックスフォードやケンブリッジのカレッジの場合でも 建物自身が大変に古く 使用している石等が風化されている。これを修理したり 新しく建てなおしたりする場合 日本では多分モダンな住みよい設計に変えたがるであろう。ところがこれらのカレッジの場合には たとえ新しいレンガや石を使ったとしても 建物のスタイルはもとの原型を絶

対に変えようとはしないそうである。

こうした形而下の面のみでなく 形而上の面でも 英国国民の生活の中でその伝統の墨守 古さの尊重という精神はいまだに脈々として生きている。王室に対する英国国民全般を通じての深い愛着などそのよい例であろう。

実際 滞英2年の間で王制廃止をととなえたり 女王に対する反感を示した英国人に私は1人も出会わさなかった。大学などに奉職しているインテリ連中ですらそうである。映画館へ入っても 劇場でもテレビ・ラジオでも最後には必ず女王の姿の映画が上映され 国歌が演奏されその間人々はちっとと起立しているのである。

こんな風景は日本では今完全になくなっているシーンであり 最初出会ったとき 私は本当に奇異の感にうたれたのである。

同じようなことが 今もって生活の中に生きている身分感・階級感の中にもはっきりみられる。カレッジの食堂でのテーブルの差別については 前に書いたが こうしたことは日常生活の節々に感じられるのである。

この階級差が保守党と労働党への支持票の差となっており、日本では いわゆるインテリ階級には社会党支持票が圧倒的に多いようであるが 英国の場合 大学などに奉職している人々の間に 案外に保守党の支持者が多いのに驚かされる。彼等の中で生活してみてもその原因が 結局階級感にあると 私には判断できたのである。

さて こうしてよくみると 英国国民はカビくさい伝統や古さばかりを大事にしている国民のようにみえる。しかし 別の面から眺めてみると 彼等は決して古さばかりに固着しているがん固者なのではなく 色々な面 ことに国内・国外の政治の面で大変新しい合理的な歩み方をしていることがわかる。

「ゆりかごから墓場まで」というのが英国の社会保障政策を端的にあらわす言葉だということ はあちこちで紹介されている

現実には英国の社会保障制度は その言葉そのままである。私は滞英中に足の裏の魚の目が悪化し病院で手術したことがあり その際英国の医療システムについて多少知ることができたので その模様を 少し書いてみよう。滞英2年目には英国政府から俸給をもらっていたので 年俸 100万円のうち2万5千円程度の健康保険の

掛金を出しはしたものの 私が足の手術を受けた当座は全然掛金を払ってはいなかった。そのため果たして普通の町医者で手当をしてくれるのか 手当をしてくれたとしても多額の金を請求されるのではないかと半ばおそれて 医者に行くのをちゅうちょしていた。魚の目が悪化して歩行も困難を感じるようになったので仕方なく町医者を探ねたら すぐ病院に手配し手術日をきめてくれた。病院では待たされはしたが ともかく手術はしてくれるし 予後の手当も完全にしてくれた。私はこれは大変な額の請求書がくるなど内心覚悟していたのであるが 結果は これらの診察・手術・手当の費用が完全に無料であったわけである。

その後友人などに色々聞き合わせてみると診察・手術は勿論のこと入院費までいっさい無料であり その上歩けない病人の場合には救急車が病院まで送り迎えをするそうである。外人に対しても British Council 等の世話で滞英している留学生は 掛金を出していなくてもいっさい無料であり 一般外人の場合は滞在半年を経過したら 普通並に掛金を払われるが それ以前は無料であるという話であった。医療保険もこれだけ徹底するとむしろ痛快である。

老人の年金も充実していて週3～4千円程度以上の年金が支給されているので つつましく生活すれば一応それで暮しをたててゆくことができる。こうして 文字通りゆりかごから墓場までの社会保障が充実しているわけであるが これは高率の累進課税と煙草・酒などに対する高率の税金及び掛金によってまかなわれているわけである。この制度は実は労働党が内閣を取った時に創設されたもので その後保守党に変わった後も その良さが国民の間にしみ込んでいたため それを変えることが出来なかったものなのだそうである。いや実際には労働党が天下をとっている間 保守党陣営では 労働党の政策を徹底的に研究し その良さを取り上げ次の選挙の折には社会保障その他で ほとんど労働党と変らない政策を掲げて戦ったために 政権を奪いかえたという話である。つまり 英国では保守党といっても決してコチコチの保守主義ではなく 進歩的な政策をもった保守主義なのである。このことは 現在のマクミラン政府のとっている植民地政策や東西間の冷戦をなくそうとする外交政策などでも伺い知ることができる。もっとも 一方の労働党も社会主義政党というには少し首をか

しげたくなるほどに右寄りの政策をもっている。つまり 両方がそれぞれ少しづつ左及び右に寄り合っているわけである。ただし 昨年の選挙での大敗以後 労働党左派が大部力をもりかえしてきて より社会主義的政策がとられようとしつつあることは注目に値する。

さて 英国国民の古い伝統を大切にする国民性から考えると 社会保障その他のいわば新しい進歩的な政治がとられていることが 他人目からみると何となく矛盾しているように思えるのであるが 実際にはそうした矛盾は感じられない。古さと新しさが共存共栄しているのである。というよりは 実はこれらの新しい福祉政策は英国国民の長い間の闘争によって勝ちとられたものなのである。このことは マグナカルタ以降の英国史をみるとよくわかる。ただ 英国人は一挙に変革をしないで徐々に変えていっているのであり こういうところに英国人の国民性が反映されているのであろう。やはり 大人の国民であると感じられる。

マープルアーチ側のハイドパークに夕方行ってみると いつでもたくさんの人だからが 何か所にも作られている。全く任意的に発生した個人演説会である。ここには何か発言したい人が誰でもきて 勝手に思うことをしゃべり出す。英国政府テンプクのことでもよいし 反植民地政策でもよい。ユダヤ人撲滅論をうつものもあれば 伝導師がキリストの福音を説いていることもある。演説の内容は極左から極右まで実に千差万別である。こうして演説している人をぐるっと囲んで聴衆の輪ができていたのであるが その輪が多いときには20を越す場合すらある。やがて聴衆と演者との間に激論がたたかわれ出すのはもちろんであるが そのうち聴衆同志の間で議論がはじまり それがまた新たな輪になっていくのである。私はこの演説会場が英国における言論の自由を最もよく表現しているものだと思い 大変興味を感じていたので 町に出たとき時々ここに立ち寄り演説に聞き入ったものである。そのうち 私もまた議論をふきかけられ 討論に参加してしまったことがあるが そのときはたしか 当時上映されていた溝口健二監督の「赤線地帯」の中にみられた 日本の売春制度について 激しく攻撃されたかと覚えている。

ともかく ここハイドパークではどんな種類の議論をしてもかまわないことになっており その演説の内容に

よって検挙されたりすることは全くないそうである。言論の自由は この例でよくわかるように大変徹底している。その別の面でのあらわれが たとえば ロンドン大学の教授に何人もレッキとした共産党員がいる事実とか 共産圏への渡航が日本の場合と比べて はるかに自由にされている事実などとしてあらわれてくるのである。

#### 英国人 ことに南部の英国人は徹底して個人主義的である

自分の生活は自分で守り 他人からは口出ししてもらいたくない。そのかわり他人にも決しておせっかいを焼かないという態度で生活している人が大変多い。私が下宿探して困ったときの英国人の態度については前に書いたが 基本的にはこういう線を守っている。隣近所づきあいとか 親類づきあいのうるさい日本のいなかに住んでいた私には こうした個人主義のほうがいっそうさばさばして気持良かったが 時にはなんと冷たい人種であろうと思うこともあった。たとえば 教室の誰かの練習者が死亡しても 教室の誰 1人として葬式に参列するのではなく 香典をやるわけでもない。遠い外国に旅立つ友達がいても よほど親しい人でない限り駅や空港まで送り迎えなどしないのである。教室で別れのあいさつをすればそれで十分で 二重に手間をかける必要はないといった考え方であろう。

不必要なくらいに 親切の押し売りをする日本的習慣からみると 冷淡そのものである。こうした個人主義は親子の関係にも及んでいる。一般の英国の家庭には 日本式の家族主義は全然見られなくなっている。子供が結婚すれば必ず別世帯をもち 親とは離れて生活する私が最初下宿していた家庭は 80才近い老夫婦だけで構成されている。数人の子供がいるのだがそれぞれ結婚して一家をなし別居している。80才に近いこの老夫婦は養老年金で 一応生計を立てられるのであるが 孫達にクリスマスプレゼントを買うために下宿人を置いて収入を計っている。日本でいえば さしずめ長男夫婦のところでゆうゆうと楽隠居をしているだろうこの人達が今もって 下宿人のための食事を作ったりベットを作ったりして 子供にたよらず自分で暮しを立ててゆこうとしている その独立精神は見あげたものである。

こうした家庭は決して特殊なものでなく 英国内でごく一般にみうけられるものである。もっともこれがこ

うじて 一人とり残された老人がぼつねんとわびしい下宿住いをしているような例がふえ 社会問題化されてはいるが……

他人に干渉しない主義の別の面でのあらわれが 公共の場所で憶面もなくくりひろげられる 恋人たちの愛ぶシーンであろう。私はヨーロッパ各国を歩き回ったが 英国ほどこれの激しい国はなかった。実際 公園の芝生の上・ベンチ・バスの中・映画館の中などで平然と行なわれる接吻・抱擁には そのシーンに慣れていない人は目をまわしてしまふほどである。こうしたシーンを写真にとってもご当人たちは平気な顔をしている。ただし そばにいる人から「他人のことに干渉するのは良いことではありませんよ」と その写真家はたしなめられることであろう。もっとも こうしたシーンは戦後ことにはげしくなってきたそうで 昔はこんなにひどくはなかったとおばあさん達から聞きはしたが……

一般的にいってこのような個人主義は 昔はそれほどひどくはなかったようである。その証にウェールズとか北英の方のいなかに行くと 日本式の家族制度がいまだに残っているし お葬式のときには親類縁者・隣近所が集まってくるそうである。南英でとくに個人主義的傾向が強いのは 人口の多くが農牧業等の第一次産業から離れて 工業人口に吸収された結果生じたものであろう。だから 北イングランドの人達と友人になるには1週間でもたりが 南英の人達とは一年以上つき合っても なかなか深い友達にはなれないといった結果になってきているのだと思われる。

イートンカレッジのような昔ながらの特権教育が行なわれ 学校の演劇公演にフォーメールドレスが要求されるような昔ながらの生活感情と多くの人口が工業労働に吸収された結果生じた徹底した個人主義的生活感情と この2つは私にはどうしても相対立し相矛盾するもの 古いものと新しいものの両極端であるように思える。

それにもかかわらず 英国の生活では両者が矛盾せず に共存しているように私にはみえるのである。不思議だというほかはない。もっとも 英国人が日本人の生活をみれば 同じ矛盾を見いだすかも知れないが……



イートンカレッジ



イートンカレッジの壁にほり込まれた卒業生たちの名前 1,700年代の年号がみられる



イートンカレッジの教室



イートンカレッジのレンガの壁とイートンボーイたち



← ケンブリッジのキングスカレッジ

ケンブリッジやオックスフォードのカレッジはみなこうゆう古い様式である



ウインザー城の番兵さん  
(いまだにこの服装を厳守している)



競馬で有名なアスコットの酒場(パブ) このような古い  
様式の酒場が多い



ケンブリッジの市街



ロンドン市内のモダンなアパート (こんなモダンなのはほんとうに少ない)